



北部地域において、自社の強みを活かし、積極的に将来の産業構造や顧客ニーズに備えて努力を続けている中小企業を紹介します。

精密板金・製缶加工技術で、鉄道車両や船舶関連、各種産業機械など幅広い分野に展開



代表取締役 芳賀 康典 氏

当社は、精密板金・製缶加工全般を手掛けています。かつては食品加工機械をはじめ各種産業機械関連を中心としていましたが、約20年前より鉄道車両にも携わるようになりました。現在は、鉄道車両の車体下部の筐体、座席シート

の骨組み、駅構内のエレベーターや自動改札機の外装のほか、船舶の操舵室のコンソールの加工なども行っています。とりわけ人の命を預かる鉄道車両の筐体や車内設備は、手作業による溶接の幅一つをとっても厳しい基準が設けられており、極めて高い精度が求められます。苦心しながらも長く携わることで、高精度・高品質な加工を実現する技術力を磨いてきました。検査基準のシビアさゆえに他社が参入を断念するケースもある中で、継続して受注していることは当社の技術力の証でもあります。実際にその実績が信用となり新規の顧客獲得につながったこともありました。



駅のエレベーターなど鉄道関連を数多く手掛ける

レジンが秘める無限の可能性に挑戦する新事業、自社ブランド「Resin+ (レジンプラス)」を始動

先代から鉄やステンレスを使ったものづくりに関わってききましたが、私の中にはずっと、「自社ブランドを持ち、新たなものづくりで事業を展開したい」という思いがありました。

試行錯誤する中で2018(平成30)年に出合ったのが、レジンという素材です。2種の液体の化学反応により硬化するエポキシレジン、木材などの異素材と組み合わせたり、硬化の途中で中に物を入れて閉じ込めたりと、多様な表現・造形が可能な素材です。木材とレジンとを組み合わせたレジンテーブルをはじめ、家具の新しいマテリアルとして国内外で注目されつつあります。同年に商品開発をスタートし、2019(令和元)年には国際デザイン製品展『DESIGN TOKYO』に自社ブランド「Resin+」として初めて出展しました。国内外から多くのお問い合わせがあり手応えは得られたものの、まさにこれからというタイミングでコロナ禍に突入したため、そこから丸2年、営業活動がストップしてしまいました。

「Resin+」が再び動き出したのは、2020(令和2)年。

劣化が進んだ屋久杉をレジンに閉じ込めてテーブルにしてほしいとのご依頼をいただきました。長さ4m、厚み17cmとい

うサイズゆえに国内のレジン加工会社から断られたとのことでしたが、従業員と共に試行錯誤を重ね、無事、完成させることができました。この仕事が信用につながり、2023(令和5)年には京都競馬場のリニューアルオープンに向けたプロジェクトにも参加。かつてパドックの象徴だったものの、老木のため移植が叶わなかったモチノキの幹の一部とレジンとを組み合わせた『モチノキ時計』の制作に関わることができました。



樹齢1700年の屋久杉を使った特注レジンテーブル

こうした過程で材料研究も製造メーカーと協力し進めており、現在は透明度・強度が高く黄変・劣化しにくいレジンを採用しています。また、地元京丹後市内の刀鍛冶工房とのコラボレーションによる日本刀をレジンに封じ込めるインテリアボードを製作し、展示会で発表しました。その際にお客様からレジンに閉じ込めた刀を取り出せないかという課題もいただきましたが、刀鍛冶工房の協力を得て実証実験を行い、取り出すことも可能になりました。



センテニアル・パーク京都競馬場の「モチノキ時計」

今後は、SNSや展示会への出展を通して「Resin+」の知名度アップに努めます。2023年9月の『東京インターナショナル・ギフト・ショー』では、タイの企業とのコラボレーションによる、竹とレジンとを組み合わせたシェードを発表しました。



刀鍛冶工房とコラボレーションした日本刀のレジンボード

並行して、販路拡大にも注力します。当社工場内に新設したギャラリーでさまざまなレジン製品を展示するとともに、建具としての可能性への期待から、入り口にはレジンの扉を採用しています。目標は、海外進出も視野に入れてレジンと足掛かりに鉄・ステンレスの加工事業の幅も広げていくこと。京都産業21の支援を得ながら多様な業界で新規顧客を開拓し、両事業の拡大を目指します。



本社ギャラリーに設置された木材とレジンの扉

Company Data

- 代表取締役/芳賀 康典
- 所在地/京都府京丹後市大宮町河辺2331
- 電話/0772-68-0811 ●創業/1975(昭和50)年3月
- 事業内容/精密板金・製缶加工、レジン加工